

日本英文学会
五十年小史



日本英文學會五十年小史



日本英文学会五十年小史

昭和五十三年十一月十日発行

編集・発行 日本英文学会

代表者 小津次郎

印刷所 研究社印刷株式会社

発行所 財団法人 日本英文学会

東京都新宿区中町十八(〒一六二)

電話 (二六七) 八二六三

振替 東京三一四九七六〇

© 財団法人 日本英文学会 1978

目
次

刊行の辞……………小津次郎 7

座談会 日本英文学会五十年の歩み……………齋藤 勇 11
福原麟太郎

旧会長の思い出……………石田憲次 41
中島文雄
平井正穂

日本英文学会地方支部の歴史と現況……………53

北海道支部 中部支部
中国・四国支部 九州支部

座談会 日本英文学会の現状と展望……………67

(司会) 志村正雄

(出席者) 安東伸介 宇賀治正朋

大橋健三郎 小林萬治

鈴木建三 長谷川欣佑

思い出・エピソード

大澤 衛 大和資雄 沢崎九二三

上野直蔵 寿岳文章 朱牟田夏雄

鈴木幸夫 成田成寿 近藤いね子

小野協一 植田虎雄 後藤武士

湯浅信之 加藤 孝 大山敏子

加納秀夫 山浦拓造 柏倉俊三

小池 滋 上島建吉 喜志哲雄

日本英文学会五十年の沿革・年譜

あとがき



日本英文学会五十年小史

刊 行 の 辞

日本英文学会は本年十一月をもって創立五十周年を迎えます。御同慶にたえません。

われわれの学会は形式的には、一九一七年九月に設立された東京帝国大学英文学会に源を発している、といえましょう。その研究発表誌たる『英文学研究』は一九一九年十月に創刊されましたが、一九二六年四月、すなわち第六卷第一号の公告によれば、同誌は今後、東京帝国大学のみならず、全国の帝国大学英文学関係者の論文を掲載することとし、さらに「将来は各大学、各専門学校のみならず、その他の方面からも、この企てに賛成する同好の士が現われ、互いに励まし合いながら研究を進めたいものである」と記されておりますから、日本英文学会設立の気運はすでにある程度熟していたものと思われませんが、それから二年半の後に、いよいよ実現の運びとなりました。さらに一年半を経過した一九三〇年四月には、会員一二〇〇名と報じられておりますが、当時の英文学人口から見て、これは驚くべき数であり、英文学研究熱の澎湃たる高まりは、

感動的とさえいえるかと思えます。同時にまた、昭和の初年にこのような全国的規模の学会を設立されました学会指導者の高い識見に、心からの敬意を表するものであります。

日本英文学会はその成長期において、戦争という異常事態に遭遇し、学会としての機能をほとんど停止せざるをえない不幸を経験いたしました。諸先輩の御尽力により、事態の終焉後いち早く学会活動を再開し、現在では英語英米文学の全領域にわたる総合的学会として、その地位を確立しております。今日の隆盛を見ましたことにつきましては、会員各位の御協力の賜であることは申すまでもありませんが、学会の目的と事業に賛同し、さまざまな便宜を与えられました会員以外の方々の御好意に負うところが多いことを記して、感謝の意を表したく存じます。

日本英文学会は会員の研究を促進し、会員相互の学問的交流を深めることを目的として運営されておりましたが、最近になりまして、研究領域の拡大、研究方法の多様化が目立ち、また一方において、研究の細分化と専門化の傾向が顕著になってまいりました。さらに、学問的情報の増加は実に驚くべきものであります。日本英文学会はこれまで、年一回の大会開催と、発行回数に多少の増減はありましたが、『英文学研究』の刊行を主たる事業内容としてまいりました。これは今後とも学会の中心的事業として継続されるであります。次の半世紀にさらに飛躍的発展をとげようとする日本英文学会としては、このさい慎重にして、しかも旧套にとらわれることなく、果敢なる態度をもって新しい学問的情勢に対処し、試みるべきことは試みることに、緊急

の要務であるように思われます。

この時にあたり、われわれが先輩から何を与えられ、後輩に何を伝えようとするかを考える一助として、日本英文学会小史を刊行することにいたしました。編集業務に従事されました方々に厚くお礼を申し上げます。

一九七八年八月

日本英文学会会長 小津次郎



座談会

日本文学学会五十年の歩み

齋藤 勇

福原麟太郎

小津次郎

はじめに

小津 今日、齋藤先生、福原先生にわざわざお越しをいただきまして、どうもありがとうございます。先生方がお作りになりました日本英文学会が一九七八年に五十周年を迎えます。私はたいへん気付くのが遅かったのでございますが、広島で英文学大会がございました時に、それが第四十八回の大会であるということを知りまして、それでは五十周年というのが近いんだと思ひまして、そこで資料を調べてみましたのですけれども、事務局のほうにその古い資料というのはいまはあまり残っておりませんが、『英文学研究』がございまして、それが主たる資料になったわけでございます。『英文学研究』の第九巻第一号、これは一九二九年の一月に発行されたものでございますけれども、昭和四年ということになります、その編集後記、雑録と書いてございすけれども、そこに署名がS・Iとありますから、これは市河三喜先生だろうと思ふんですが、この市河先生がお書きになりました文章の中でこういうのがございます。「わが『英文学会』を全国的のものとし、広く同好の士の入会を募つてみたいと考え、去る十一月五日東大英文学科の関係者だけ集まつて予備の相談会を開いたのである、云々」とございまして、そうしてそのおしまいのほうに「一般同好者への勤誘の結果、今日（一月七日）までに約三百名の新会員を得、なお継続入会申し込みの通知が来つつあるが云々……」というふうに、市河先生がお書きになってお

られますので、これを拝見致しますと、昭和三年の十一月に日本英文学会というものを作ろうという決議がなされ、そして一月七日というのは正月早々でございますから、事実上、昭和三年の暮れぐらいに、約三百人ぐらいの新しい会員が得られたと、こういうことだろうと思います。日本英文学会という文字が活字となつて現われますのは、昭和四年でございますけれども、今のような点から考えまして、事実上日本英文学会というのは昭和三年の末に発足したのではないかと、そういうふうに考えますわけで、そう致しますと昭和五十三年が五十周年になると思います。

そこで、今日は齋藤先生、福原先生——実は土居先生にぜひお加わりいただきたいと思つておりまして、ご了承を得ていたのでございますけれども、ちょっとご健康の関係で今日ここへは行けないということでございますので、今日は両先生から、英文学会発足



齋藤 勇氏(左)と福原麟太郎氏(右)

当時のいろいろご苦心もございましたでしょうし、またご記憶に残るようなこともございましたと思いますが、そういうお話、この五十年間の英文学会の歩み、それからわれわれ、両先生にとってははるかに後輩に当たりますけれども、われわれあるいはさらに私なんかよりもっと若い世代に対して、先生方からのご要望と申しますか、そういうようなことを承りたいと思っております。

今日は、両先生にご自由にご歓談をいただきたいと思うわけでございますけれども、一応進行係を外山さんが務めてくださることになりました。どうぞよろしくお願い致します。

草創のころ

外山 随時、会長にもご発言いただくことにしまして……。ただ今のお話にありました、その東京帝国大学英文学会から、日本英文学会に変わりますのが昭和三年の十一月……。

小津 十一月五日にそういうご相談があった。

外山 その前後のことを齋藤先生からお伺いできませんでしょうか。

齋藤 土居さんがいらっしゃれば、いろいろ私を補ってくださいと思うんですが、だいたいのことは私も記憶してますから、それを申し上げます。

初めは、東京帝国大学の英文科の会でした。そして一年に一冊、現在の雑誌の形よりももう少